

かなしのなげ

奈良工業高等学校
現代視覚文化専門学校
2016年度
研究会
秋会誌

Modern Visual Culture Creators Circle



目次

まえがき 1

小説作品

この世界の神様	フランカー	3
しあわせさがし	猫にゃん	4
隠れ鬼ごっこ	若葉	8
ふたりぼっち	みのすけ	13
便座カバーの青を見た	ツリウム	15
少年	箱庭氏	18
彼女と林檎と最後の我儘	小刀	21

イラスト

死神	26
きな粉もち	27
黒ウサギ	28
クロード	29
Tadaren	30
猫にゃん	31
ぶっちー	32
箱庭氏	33

あとがき 34

まえがき

今回も何を書こうか迷ってしまうまえがきのコーナーです。

毎年、ゆるい感じで始まるこの「なげなしのかね」ですが、このゆるさにもセンスがいるんですね……。歴代会長の堅苦しくないユニークなまえがき達が私は好きです。気になった方は、現視研ホームページから、過去の会誌をご覧ください。

さて、このたびは奈良高専の高専祭に足をお運びいただき、そして私たちのサークルにもお越しいただいて、誠にありがとうございます。

さらに、この冊子を手に取り、そして丁寧に最初の前書きから見てくださいている読者の皆様、こんにちは！ 私は現代視覚文化研究会の会長、内田啓太（ちげ）です。ご覧の通りこのサークルの名前はとても長いので、たいていの場合、「げんしけん」と省略して呼ばれています。

現視研では、創作活動を中心に活動しています。オリジナル小説など文章を書く人がいたり、イラストを描く人がいたり、パソコンで音楽を作曲する人がいたり、プログラミングでゲームを作る人がいたり、人によって創作物は様々。時々集まっては企画をでっち上げて、協力してゲームを完成させたり、できなかつたり……。そして迫りくる「進捗どうですか?」。そんなときはこの合言葉、「そんなものは無かった。」

有志が集まれば、TRPGやらボードゲームやらが始まって、なんやかんやと賑やかなサークルです。

この「なげなしのかね」には、そんな個性あふれる会員の創作物が多数収録されています。しかし会長の私は様々な事情（言い訳）で、創作物を期限内に作り終えることができませんでした……。

（毎年×切りギリギリになるという計画性のNASA）なので会誌には

私の作品は載っておりません。

仕事が快調でない会長で申し訳ない……。

収録作品は、文章班の小説、イラスト班のイラスト、コラムなど、どれもセンスの光る作品で、私は身が引き裂かれるほどうれしいです。

同日、音楽班作成のCDも無料配布しておりますので、そちらもぜひ、お手に取っていただければと思います。また、現視研のホームページにも創作物をいくつか掲載しております。掲載している作品数はまだ少ないですが、ぜひチェックしてみてください。

ところで、マイクラだったり動画だったりHTMLだったり、夏休みいろいろなことをやりすぎて、お絵かきする時間を無くしてしまった私ですが、優秀な後輩たちのイラストをみて、「わしのこの画力じゃダメじゃな」と感化されました。

画力をつけるには、絵をいっぱい描くしかありません。もちろんやる気も、時間も根気も必要です。それが面倒に感じる時もあります。しかし、やはり他人から受ける影響というのは大きいもので、妙にお絵かきしたいという意欲が湧き出しております。みんなでお絵かきする企画も久しぶりにやってみようかと思ってみたり。仕事じゃないんだから、楽しんでお絵かきできなきゃ意味がない！ テストも終わったことだし、有意義なキャンパスライフを送ってやるぞう！

電気工学科三年

内田啓太（ちげ）

小説 作品



この世界の神様

フランカー

この世界にはたった一柱だけ神がいた。神は気分ですべてを消したり、創り上げることができるとして人々の脳に刻まれてきた。我々の常識とは違い、この世界は一つの世界に無限大の世界が広がっている。時代も、歴史も、生物も、何一つ同じものは無い。それらの世界の住民は他にも世界があることを理解し、行き来することができる。彼らは皆総じて自分のことを役者と呼ぶ。神が我々を操っているのだと、我々は役者であり続けるしかないのだと。それでも彼らは演じ続けた、啓示に従いひたすらに演じ続けた。啓示通りに演じたとしても前触れも無く消された者も居る。求められれば同じことを何度も何度も何度も何度も完璧に繰り返したし、いかなることでも求められても完璧に演じ続けた。

ある日、一人しかないと思っていた神が何億柱も世界に下りてきた。一日中役者達と共にいるのもいれば、何度か来てどうとう帰ってこなくなつた神もいた。一つとして同じ神はいなかったが、人々は衝撃を受けた。なぜなら神々は自分達とどうみても同じ生物にしか見えなかったからだ。それでも彼らが役者でありつづけることには変わらなかつた。

一つ変わったことといえば神々が同じ役者となつたことだろうか、変わったことといえば、物語がほとんど神々を中心に回るものになつたことだろうか。時には神が目の前で死んだり、消えたりしたが神々は全員少したてば戻ってきた。役者達はさらに恐れたという、演じる中で仲間が死んだり、生き返ったりすることはままあることだったが、なんの前触れも無く消えたり、することは無かつたからだ。消えるという事自体が演じる中でしか見なかつた役者達はとても驚いたという。

そしてついに全ての神々が役者達の世界から消えなくなつた。彼

らと同じように生活するようになった。それでも世界は消されたり、増やされつづけている。

またある日、神々が急に騒ぎ出した。

「なぜ操作できないんだ！」「エデンが壊れちゃったんだ！地上にはもうだれもないから修理できない、何が起こるかも誰にもわからない！」

役者達は今まで演じてきた中で神々のいうこと言葉が理解できるようになっていたが、エデンが何を指しているのかはわからなかつたが、意味としては『楽園』であるということはわかつていたので疑問に思っていた。すると二人の役者が

「エデンとはなんですか？」

と神々に問いかけた。

「ああ？それはお前らを操る——」

そこまで言つて答えた神はありえないものを見るような目で彼をみた、役者達もだつた。彼らは自我があるとはいへ、物語に沿わないことを発言したりすることはありえなかつたからだ。この瞬間、役者たちと神々を区別するものは何一つとしてなくなつた。

それからは今まで世界を自由に行き来できた神々はできなくなり、世界を消し去つたりすることはできなくなつた。新しい物語、しかし台本は無いものを彼らは演じ始めた。すると困つたのが放棄された世界にいた神々だ、観光として彼らは放棄された世界に行つていたが、そこから出られなくなつてしまつていた。何度も何度も途中までしか書かれていない物語を役者たちと演じることになつた彼らはどうなつたのだろうか、もはや神では無くなつた彼らは壊れた人形のように演じ続けることしかできなかつた。だがまだ役者達は信じきれないので、これすらも別の神々が作つた物語ではないのか、と。

しあわせがし

猫にゃん

高校一年生の春、というか高校の入学式の日。初めての登校を終えて早く到着してしまった事を反省しながら、私は学校の敷地内を散歩していた。教室や、池や、図書館を見て回って、何気なく運動場をぐるっと回ってみる。すると、運動場の端で気になるものを見つけた。気になると言ってもそれは別に奇抜な変わったものではなくて、よくあるシロツメクサの群生だ。シロツメクサ、いわゆるクローバー。四つ葉を見つけると幸せになれるというあれ。自分の左手首を見てみる。腕時計が、まだ時間はあるよと教えてくれた。つくづく早く来すぎてしまったと思う。時間潰しにはちよいどいいだろう。誰もいない運動場に座り込んで、私は四つ葉のクローバーを探し始めた。高校一年生がやることではないかもしれない。八歳の小学生ならまだしも。そう思いながら、四つ葉に見えた葉を摘み取った。三つ葉だった。他の葉が重なっていただけだった。

八歳、小学三年生の秋。私は、一週間だけ特別な生活をした事がある。「特別」と言えば普通はポジティブで前向きな意味で普通でない事を表す気がするから、ひよつとするとこれは「特別」ではなくて「特殊」だとか、あるいはもつとマイナスのニュアンスを強く「異様」と言いかえてもいいかもしれない。けれど、ならその一週間は私にとって悪いものだったのかと言われるとそうではないと思うのだ。確かに普通よりひどい環境ではあった。しかし当時の私にとって環境は全く重要ではなくて、重要なのは人間関係であった。そのひどい環境の中で、私は特別な人間に出会ったのだ。きつと彼女に出会わなかったのなら、私はその一週間の事をもう忘れているだろう。だけれど出会った。だから、あの一週間は十五年以上に及ぶ私という人間の歴史において最も輝かかった時間の一つである。私は記憶している。彼女がその一週間を特別に変えたのだ。その

七日間は特別で、そして充実していた。

さて、その時私がしていた特別な生活とはどのようなものか。特別な生活と言っても別に家を出をしていたとかいうわけではない。そんな大事ではないのだ。かと言って、旅行をしていたとか親戚に預けられていたというような些事でもない。私は一週間だけ、避難所で生活していたのだ。原因は超大型の台風だった気がするけれど、それはどうだっていい。

避難所生活。辛く苦しいイメージのある言葉かもしれない。実際につらいのかもしれない。両親はつらい時間だと記憶しているのかもしれない。けれど私はそう思わなかった。いや、ハードな仕事という意味での物理的なつらさはなかったというだけで、精神的にはつらかったのだけれど。そのとき避難所では、両親を含めて大人達は何らかの仕事をしていた。水や食料の確保であったり、衣服であったり情報伝達であったり、仕事はいくらでもあった。けれどいくら仕事があった所で、年齢二桁にならない女兒にはその一つも回ってこないのだ。だから私の仕事は、学校に行くこともゲームも読書もできない状況で、時間を消費することだった。避難所になった体育館の壁にもたれて、時間をただ過ごす事だった。もう少し家の場所が小学校寄りだったなら、私は通っている小学校に避難できて退屈しなかったはずだ。クラスメイトたちと遊べたはずだ。けれど、私の住んでいる地区の人は小学校の体育館より近い高校の体育館に避難するように決まっていた。そしてその地域に小学生は私一人だけだった。高校の体育館だから高校生はもちろんいたけれど、高校生にもなれば仕事は回ってくる。それに、中学生や高校生には自分の友達がいる。誰も私の相手はしてくれない。何かがあった。寝ようと思つたけれど、仕事をしている大人で騒がしかったしそもそも寝るような時間ではなかった。できるなら勉強や宿題でもしただろうけれど、それすら家に置いてきていたし、家に帰る事はもちろん全面から禁止されていた。

そうして、たぶん六時間くらい潰した。

全く無意味で何もしない時間として、本当にただ潰した。

そしてそのときふと、体育館の反対側の端の方に自然と目がいった。とつくにもものを見ることなんてやめて、ただ意識を消すことに努力していたのに。なぜか不思議と、自然にそこに視線が移動した。そしてそこに、求めているものがあった。

いつからいたのだろう。私と同じくらいの女兒が、私と同じように、時間を潰すことに躍起になっていたのだ。すぐに立ち上がって、足が痺れて一度倒れて、もう一度立ち上がってその子のところまでかけて行った。その子との距離が小さくなっていつて五メートルくらいになったとき、その子もこちらを見て、認識して、ぱあっと明るい顔をした。たぶんそれは彼女を見つけたときの私と同じ顔だっただろう。

「こんにちわ。ねえ、あそぼ！」

「うん！」

名前も聞かず、私たちはまずそんなやり取りをした。彼女に出会ったおかげで私は退屈をしなくてよくなった。私に出会ったおかげで彼女は退屈をしなくてよくなった。退屈は人を殺すという言葉があるけれど、それにならうなら、私たちはお互いにお互いの命の恩人だった。

二人でかけ回った。体育館の中を、できるだけ人の邪魔にならないように。それだけで楽しかった。六時間の退屈は十歳の子供には拷問だったから、その反動がもろにきていた。

「ねえ。きみ、なまえ、なんていうの？」

私はそう聞いた。

「うちは、さらぎ、ゆら！へびのくちつてかいてさらぎつてよむねん。ゆつてかんじは、むずかしい。らはいいつてかんじ」

ゆらは関西人らしかった。関西弁でそう答えた。八歳の女兒に漢字は難しかったしどうでも良かった。私も、ただゆらという呼び名ができればそれでよかった。

「あんたはなんてゆうの？」

ゆらはそう聞き返した。

「ひかり、さら！ひかりは、そのままひかりつてかんじで、さらつてじは、むずかしい」

私は答えた。

「ひかりつて、みようじ？へんななまえ！」

「へびのくちでさらぎつていうの？ふしぎななまえ！」

そう言つて笑いあつた。私たちはすぐに打ち解けた。お互いしか話し相手がいないから、当然かもしれないけれど。

ゆらと過ごす時間は楽しかった。お互いしか相手がいないその環境は、私たちの距離を必要以上に縮めてゆく。お互いいろいろなことを聞きあつた。私は学校のことや家族のことを話した。ゆらは両親の仕事で三日だけ奈良からこちらに来ていたことを教えてくれた。ゆらの学校のことや、奈良県のことを教えてくれた。趣味のことも、好きな食べ物のことや、好きなアイスのことや、好きな漫画のことも、お互いのことで知らないことはないんじゃないかと思うくらい、私たちは包み隠さず話し合つて、お互いを二つに分けている境界がぼやけていくような感覚に酩酊した。避難所生活一日目の夜には、私とゆらは同じ毛布にくるまって眠っていた。

「きょうはなにするん？」

「なんでもいいよ！」

二日目も三日目も四日目も五日目も六日目も、私たちはずっと二人でいた。お互いしか相手がいないという意味で、私たちは二人ぼっちだった。かけがえのない自分の片割れを見つけたような感覚だった。お互いに、この子がいないといけないと思つていた。この子しかないと思つていた。何をするにも二人で一つになつていた。お互いの得意なところと苦手なところもわかつていたし、どんなことも自然に分担して二人でやつていた。私はゆらがいなくて成り立たなくなつていた。ゆらも私がいなくて成り立たなくなつていた。けれど、お別れの時はやつてくる。

ある程度復興が進んだ七日目、私もゆらも自宅に帰ることになつ

た。お互いにお互いの悲しそうな顔だけでわかるようになっていたから、何も言わずに同じように遊んだ。昼過ぎに、ゆらは両親と一緒に自分たちの荷物を片付け始めた。私は最後に、宝物を見せてあげた。

それは、家から逃げ出すときに唯一持ってきた私の宝物。四つ葉のクローバーの押し花のしおりだ。普通の四つ葉よりも二回り三回り大きな特大の四つ葉が使われている。

「ゆらちゃん。これ」

「うわあ、かわいい！ええなあきらちゃん。それどうしたん？」

「きらがとってきたよつばなの！おかあさんにしおりにしてもらったの！わたしの、たからもの！」

「たからものかあ……。ええなあ。うちもそういうのほしいなあ……」

「さがせばいいよ！こうえんとか、がっこうのなかにわにいつばいはえてるから、よつばもきつとあるよ！」

「そっか……。せやな。おつしや。じゃあ、うちもこんどあうときまでに、もつとおつきいよつばみつけといたんねん！」

ゆらは元気に笑った。私も笑った。だけれど、「こんどあうときまでに」という言葉がずっと私の頭の中でぐるぐると回っている。それはとうやら、涙をこらえている私を押しつぶそうとしているよ。きつとゆらの方も同じだったのだと思う。

私たちは同じようにちよつとだけ泣いて、それで、笑ってお別れした。

「またね、ゆらちゃん」

「またな、きらちゃん」

さよならは言わなかった。言えなかった。そんなことを言ってしまったら、本当に泣きじやくってしまつて手がつけられないとわかつていた。

ゆらの乗った自動車が見えなくなるまで手を振って、私も両親と一緒に自宅に帰った。

そうして特別な一週間は終わった。

やっぱり、あの環境は私にとつてもゆらにとつてもよくなかったのかもしれない。私はその一週間でゆらという存在に完全に依存してしまつた。たぶんゆらも同じだ。それまでは一人で構わなかったのに、二人でいることを知ってしまったって、一人でいることがたまたまなくつらくなった。その一週間が特別な時間だったせいで、特別すぎる時間だったせいで、それ以外の時間がつらく暗く感じられるようになってしまった。

高校生になった今でも、私はあの時間に縛られている。だからこうして四つ葉のクローバーを探している。

四つ葉のクローバーを、一つ見つけた。財布に挟んである宝物のしおりと比べてみる。今見つけたやつは、しおりのものより一回りも二回りも小さかつた。

私は小さいクローバーを投げ捨てた。運動場の端に、小さな幸せを一つ投げ捨てた。まだ時間はある。もつと大きな幸せを探そう。そう思ったときだった。

「あーあ、あかんで君。せつかくの四つ葉やのに、捨てたらもつたいない。幸せが逃げるで？」

後ろから、話しかけられた。懐かしい声だった。ほとんど何も考えず条件反射のように振り向いて言った。李徴の声を聞いた時の衰の気持ちがあわかつた。

「……ゆら、ちゃん？」

私に話しかけてきたその女子は、こちらを見て、認識して、途端にぱあつと明るい顔をした。泣き顔と笑顔が混ざつたような、とにかく嬉しそうな表情。たぶんそれは、彼女に声をかけられな私と同じ顔だつただろう。そして、八歳のときに彼女が私を認識したときの嬉しそうな顔とほとんど同じだつただろう。

蛇穴悠良と名札に書いてある彼女は、私に抱きついた。私もゆらを抱き返した。

そのあと、まるで八歳のときのようにお互いのことを教えあつた。

あの特別な一週間から今までのことを、それはまるで失った時間を取り戻すように。もしくは、真空になった容器の中に空気が吸い込まれていくように。私たちはお互いの空虚を満たしあう。ゆらは親の仕事の関係でここに引越してきたことを私は知った。私は親元を離れて高校の寮で暮らすということを伝えた。全てを包み隠さず教えあつて、二人だった私たちはまた一つになっていく。八歳の頃と同じように。

一通りを教えあつて、ゆらは不意に「せや」と言つてあるものを差し出した。しおりだった。

「この四つ葉、きらのより大きいやろ！どや、ちゃんと見つけたんやで！」

「そんなの、まだ覚えててくれたんだ。ありがとう、ゆら」

「当たり前や、忘れるわけあるかい」

少し泣きそうになるのを抑えて、ゆらのしおりを受け取った。それを自分のしおりと比べる。

それは確かに大きかったけれど、すぐにおかしいことに気がついた。

「どや。大きいやろ。私の勝ちやな」

「ゆら、いつの間に勝負になったのか知らないけど、これ、クローバーじゃなくてカタバミだよ……」

「は？かたばみ？」

「似てるし、カタバミにも四つ葉があるからよく間違うけど……全く違う植物だよ……」

「……………いやー。ごめんなあ……。まちごうたわ……」

照れくさそうに自分の後頭部を触るゆら。いや、間違うのはわかるけれど、なんてことをしてくれるんだ。関西人は話にオチをつけないと気が済まないと聞いたことがあるけれど、八年越し近い約束になんてオチをつけてくれるのだ、こいつは。こんなの、もう、笑うしかない。

「あははつ。ゆららしいよ、そういうの」

「やつてもうたな……また探しなおさなあかん……」

ゆらは真剣な顔をする。クローバーとカタバミの区別もつかないなんて、探しなおしてもまた間違えそうだけれど。

「もう、ゆらは仕方ないよね。ほら、一緒に探そう？」

カタバミとクローバーなら私が見分けてあげるから。私はそう付け加えた。八歳のときの感覚だ。お互いの足りないところを補いあう、心地いい感覚。

「一緒に、か……。せやな。これからは、一緒やもんな」

ゆらはそう笑つて、シロツメクサの絨毯に飛び込んだ。ふかふかで心地よさそうだ。私も同じように真似をしようとして、気付く。

「いや、ゆら！これから入学式なんだよ！？もうそろそろ時間だし！それに草の汁とかつくよそれたぶん！」

「うわっ！やつてもうた！」

飛び起きるゆら。外見は大人びた癖に、こういう所は変わってない。

「……もう、ゆらつたら、私がいないとだめなんだから」

私はそう言つて微笑む。そして、ゆらと手をつないで体育館まで向かう。今回は別に避難のためじゃない。入学式という晴れやかな行事のために。

やつぱりゆらは私がいないとだめで、私はゆらがいないとだめだけれど今ゆらは私の隣にいて、私はゆらの隣にいて、一緒に歩いている。二人が一緒ならきつと何だつてできる。

四つ葉のクローバーを見つけるように、見つけにくい幸せを一つ一つ、ゆらと一緒に見つけていけたら、それはとても幸せだつて、なんとなく思った。

これからの高校生活が、楽しみだ。

隠れ鬼(ごっこ)

若葉

「隠れんぼしよう、お姉ちゃん」

ある日の放課後。私たち姉妹が所属する手芸部の部室に来て早々、妹の天はそう言った。

「隠れんぼ？」

「そう！ 私が隠れるから、お姉ちゃんが探すの！」

「うーん、でも……」

現在、私は文化祭に出すための人形を作っている最中だ。文化祭はまだまだ先のことだが、早以内に終わらせるに越したことはない。

「文化祭なんてまだまだ先のことじゃん！」

「早いに越したことはないわ」

「そりやそうだけどき、一日くらい付き合ってくれてもいいじゃん！」

「そんなこと言って、ここ最近ずっと天に付き合ってるじゃない」

「むう……。一生のお願いだよ、お姉ちゃん！」

「もう……」

しかし、天は言い出したら聞かない子だ。もちろん、締め切り間近などのときは断れば諦めてくれるが、こういうときは何度言っても聞いてくれない。

「じゃあ私は隠れるから、六十秒数えてから探してね！」

「あ、ちよつと！」

そう言って天は部室を飛び出して行った。私は「はあ」とため息をつき、裁縫道具を片付け始めた。そして六十秒が経つと、私は部室を出て天を探し始めた。

天と隠れんぼするのは初めてではない。天が入学してからももう十回は優に越えている。

当然だが、天が隠れる場所は毎回違う。自分の教室だったときも

あれば、全く知らない上級生の教室だったときもある。体育館や図書館などにも隠れていたこともある。なので、私は天と隠れんぼをするときには、めんどろだが確実なしらみ潰しに探すという行動をとっていた。手芸部が使っている教室は校舎の三階の端にあるので、出てすぐのところにある準備室から順番に一つずつ確認していくのだ。

よって、今日も私は、一つずつ教室の中に入り、いなければ次の教室に行くといった探し方を繰り返していた。そのおかげで様々な人たちとも仲良くなれたので、案外悪くないな、と思っていた。

中学生の頃、私は友達が少ない。さらに、その数少ない友達とは高校が別になったので、高校一年生の頃の私は孤立状態にあった。部活動にも所属せず、学校が終わればすぐに帰るような生活を送っていたのだ。

その生活を変えたのは、今年入学してきたばかりの天だった。天は元気が良く容姿も整っている、すぐにクラスの中心になった。

天は高校に入ってから元気がなかった私を心配してくれていた。なので、私は天の友達が多く所属している手芸部に引つ張られるように連れていかれ、手芸部に所属することになったのだ。

そのおかげで、今の私には友達と呼べる人がたくさんいる。先生や両親からも、「去年より明るくなった」と言われたくらい、私の生活は変化していた。それもこれも全て天のおかげである。

なので私は、天のわがままに付き合うことくらいはしてあげたいと思っていた。

探し初めてから二時間が経った。いつもならばすでに見つけられている時間なのだが、今日は遠くに隠れたのか、なかなか見つからなかった。

そして、とうとう全ての教室を探し尽くしてしまった。見逃しがあるのかとも思いもう一度見て回ったが、見つからなかった。私は校舎の外にある図書館や体育館まで見て回った。

しかし、結局天は見つからなかった。携帯で「降参」と打ち込ん

でも、返信がこなかった。

そして、とうとう天は見つからないまま最終下校時間の六時を迎えた。

いつもならば、最終下校時間を過ぎたときは帰る用意をして校門前に集まるのだが、三十分を過ぎても天は現れなかった。荷物を取るために部屋に寄ったときに荷物がなかったので、帰ったのだと思っただけはそのまま帰路についた。

「ただいま」

家に着いた私は、玄関に天の靴がないことに気付いた。

「おかえり」

「お母さん、天は帰ってきてきてないの？」

「え？ まだ帰ってきてないけど」

それを聞いて私は、母に「探してくる」と言っただけで学校へ向かった。家から学校までの道のりはそう長くはないので、誘拐でないなら学校にいないと思っただけからだ。

学校に着いた私は校門をよじ登り、そのまま校舎へと入っていった。

「いない……」

校舎内をぐるりと一周したが、天は見つからなかった。それどころか、見回りの先生すら見つからないので、少し不安な気持ちになった。

ピロロン、とポケットの携帯が音をたてた。見てみると、母から「早く帰ってきなさい」という旨が書かれたメールが大量に送られていた。私は苦笑いしながら「すぐ帰る」と打ち込んだあと、ふと、天の携帯にかけよう、と思った。メールを送ったあと、天の携帯にかけながら再び校舎内を周り始めた。

しばらく歩いてみると、曲がり角の先から、ピロロロ、という音が聞こえた。それが天の携帯の着信音であることに気付いた私は、

音のした方へ駆けていった。

角を曲がると、二つの校舎を繋ぐ渡り廊下が広がっていた。天の携帯は、渡り廊下の手前に落ちていた。

「どこに行ったんだろ……」

そう呟きながら携帯を拾ったとき、天の携帯に未送信のメールが表示されていることに気付いた。見てみると、「お姉ちゃんすけ」とだけ打たれていた。

「天……」

その文面を見て私の頭の中は真っ白になった。今になってようやく、私は警察に連絡しようとしたが、自分の携帯も天の携帯も繋がらなくなっていた。

「あれ？ どうなってるの？」

何度かけても通じないので、私は連絡することを諦め、外に出ようと思った。

脇目も振らずに走り、昇降口にたどり着いた。しかし、来たときは開いていた昇降口は固く閉ざされていた。

「嘘……。どうして？」

ガタガタと揺らしても一向に開かない。それならば、と近くの廊下にある窓を開けようとしたが、こちらも開く気配はなかった。

少しすると、コツ、コツ、という足音が聞こえた。見回りに来た先生かと思ったが、天を襲った人かも知れない、と思い直し、下駄箱を利用して隠れることにした。

足音が通りすぎたとき、歩いていた人の後ろ姿を確認してみた。

暗くてよく見えなかったが、手元に光るナイフだけははっきりと見ることができた。

「っー？」

声が出そうになったので口を手で押さえた。心臓がバクバクと鼓動を強め、汗が溢れてきた。出ていかななくてよかった、と本気で思った。

しばらくその場に蹲っていたが、五分ほど経ったとき、このまま

ではいけないと思い、立ち上がった。

「とにかく、出口を探そう」

出口が見つかれば、天が見つかつたときにすぐに逃げられるし、さきほどの不審者に見つかつたとしても外にまで誘導できる。

「天……。きっと無事だよね……」

そう折り、私は先程不審者が歩いていった方へ歩いていくことにした。不審者が出口を探しているのか天を探しているのかわからないが、校舎はグルッと回れる構造になっているので、よっぽどの理由がない限り鉢合わせることはないと思つたからだ。しかし、その予想は裏切られることになった。

「っー?」

「……」

角を曲がつてすぐのところで、黒い目出し帽を被つた不審者がナイフを振り上げていた。私は咄嗟に横へ飛び退いた。先程まで私がいたところにナイフが通っていく。

不審者は振り下ろしたナイフを私に向け、ゆっくりと歩きだした。私は急いで立ち上がり、廊下を全力で走つた。怖くて振り返ることができず、ただただ全力で走つた。

どれくらい走つただろう。がむしやりに角を曲がり、階段を駆け、廊下を走つた。そして、とうとう足が限界を迎え座り込んでしまった。私は俯いたまま、乱れた息を整えつつ、これからのことについて考えた。

「これからどうしよう……」

しばらく考えている内に乱れた息がある程度整い、余裕がでてきたときにふと、ここが天の携帯を見つけたところだと気付いた。そして、顔を上げると、さっきまではなかったはずの扉があることに気付いた。

「あれ? こんなところに教室なんてあつたっけ?」

今までの生活で一度も見たことはないし、天の携帯を拾つたとき

にもなかったはずだ。一見変わったところがないその扉は、私の恐怖心を更に掻き立てた。

「ゴクン……」

整つたはずの息は乱れ、心臓が忙しく鼓動し始める。肌が敏感になり、汗で濡れた服が気持ち悪い。寒さか恐怖かはわからないが、ゾワゾワと鳥肌がたつた。

「ちよつとだけ……。ちよつとだけだから……」

私の中の恐怖心と好奇心では、少しだけ好奇心の方が強かつたらしい。立ち上がり、ゆっくりと歩き始めた。三メートル程度の距離がとても長く感じられた。

そして、手を伸ばせば届くという距離にまで近づいた。扉に手をかけたとき、手が震えていることに気付いた。

「大丈夫、大丈夫。ちよつと見て終わり。だから……」

大丈夫、と再び言うと同時に、ゆっくりと扉を開けた。

扉の先は、普通の空き教室だった。机も椅子も教壇もない。黒板しかないその教室の中央に、私の目は釘付けになった。

「嘘……。でしょ……」

そこには、六人の女子生徒が覆い被さるようになって倒れていた。床一面には、何やら黒い液体が広がっていた。よく見えないが、おそらくそれは人の血だと思つた。

そして、一番上に覆い被さっている生徒は、私の妹、天だった。

「天!」

私が叫ぶと、天はピクツと反応した。そして、ゆっくりと顔を上げ、驚いた顔をして叫んだ。

「お……ねえ……うし……ろ」

「え? ……っ!」

天がそう言うや否や、腕に鋭い痛みを感じた。後ろを見ると、不審者が私の腕にナイフを刺していた。

「痛つ……。うあ!」

不審者は私の腕からナイフを抜き取つた。瞬間、今まで感じたこ

とのないほどの激痛が走り、私は教室の中へと倒れこんでしまった。
「はあ……、はあ……！」

血がドクドクと流れていく。だんだん意識がなくなってきた。逃げなければ、とは思うが、上手く立ち上がることができない。それを見て、私が逃げることはできないと思っただのか、不審者は教室に入ってきただけで追撃してくることはなく、ただ私のものがく様を眺めていた。

「くう……」

「お姉ちゃん！」

天の声がはつきりと聞こえるようになった。ああ、そうか。私も、死ぬのか……

「大丈夫、心配しないで。お姉ちゃんは、私が守るから」

「え……？」

ふと、腕の痛みがなくなっていることに気付いた。腕を見ると、傷がきれいになくなっていった。

不審者は教室の中を歩き回っていた。おそらく、私が死ぬのを待っているのだろう。

「今ならそこから逃げられるよ」

再び天の声が聞こえた。しかし、天は生徒たちの上に覆い被さったままで動いた様子はない。不思議に思ったが、今はそれどころではない。たとえ幻聴だとしても構わない。とにかく、今は天の声が聞けて嬉しかった。

「で、でも……」

そもそも、ここから逃げられたとしても、学校から出ることができない。結局振り出しに戻るだけだ。

「大丈夫。手芸部の部屋から一番近くの窓が開いているの。そこから大きな木に飛び移れば外に出られるから」

私はいつもそこから外に出てるんだよ？　と言ひ、天が笑った気がした。なぜそんな危ないことを、と思っただと同時に、天らしいな、とも思った。

そして、それが本当なら今の私なら逃げられるだろう。しかし、天をおいていくなんてできない。

「私はもう駄目。手遅れだよ」

「で、でも……」

「一生のお願いだよ、お姉ちゃん」

もうすぐ一生が終わるんだけどね、と天は冗談めいた口調で言った。

「一生のお願い、もう何回も聞いたよ……」

そう言いながら私は、不審者が一番遠くにいるタイミングを見計らい、走り出した。すぐに気づかれたが、幸い教室に入っただけのところだったので、すぐに教室から出ることができた。

こんなに必死になって走ったのは生まれてはじめてかも知れない。体が軽い。これまでの疲れが全て消えたような、そんな感覚がした。そして私は急いで部屋へと向かって走っていった。後ろからは不審者が追いかけてくるが、距離はかなり空いていた。

そして、私は部屋の前にまで来た。不審者との距離はかなり空いていた。

「やった、開いた！」

天の言うとおりに、部屋から最も近い窓には鍵がかかっておらず、簡単に開いた。そして、窓の先には太めの枝が伸びていた。

「っ……、えい！」

距離が空いているとはいえ、もたもたしている時間もない。私は意を決して窓から枝へと飛び移った。

バキッ！

「えっ……」

飛び移った瞬間、枝が折れる音が聞こえた。

そして、折れた枝と共に私は、三階分の高さを落下していった。

「……！」

「んう……、ん」

「ああ、よかった！ 目が覚めたんだね！」

「あれ……？ ここは？」

目が覚めると、私は病院のような場所にいた。起き上がろうとすると全身に痛みが走った。

「う……」

「無茶するんじゃないよ！ あんな高いところから落ちたんだから！」

落ちた、という母の言葉を聞き、意識がはつきりと覚醒した。

「お母さん！ 天は……、イタタ」

「天は今警察の人が探してくれているよ。それよりも、どうしてあんなところから飛び降りたんだい？」

「あんなところ……。ああ、そっか……。私、三階の窓から木の枝に飛び移って、それで……！」

そして、全て思い出した。あの六人の生徒のこと。不審者のこと。天のこと。

昨日の出来事は何だったのだろうか。ないはずの教室で天たちが不審者に殺されかけて、私も危うく殺されることだった。教室も窓も開かず、見回りの先生に一度も会うことはなかった。

母の言葉を聞き流しながら、私は病室に付いている窓から外を眺めた。落下防止のためか格子がついている窓からは、真つ昼間の明るい太陽が見えた。そして、私は解放された喜びと、天を置いてきてしまったことへの後悔から泣き出してしまった。

その後、私の元に数人の警察がやってきて話をさせられた。ありのまま起こったことを話そうかと思ったが、あまりにも非現実的すぎる出来事なので、私は何も覚えていないということにした。

そして、あの日から一週間ほどが過ぎた。奇跡的にそこまでひどい怪我をしていなかった私は無事退院し、いつも通り学校に通うことができるようになった。しかし、いつも賑やかだった我が家は驚くほど静かだった。

学校では、私は手芸部を辞め、天がいなかった頃のような学校生活を送っていた。

例のあの教室があった場所には何も無い。あのとき体験したことでも夢ではないかと時々疑いそうになるが、あの夜、同時に七人が行方不明になっているとテレビでやっていた。それを見るたびに、あの日の恐怖と後悔が込み上げてきた。

ある日、渡り廊下を歩いていたとき、あの教室があった場所から「お姉ちゃん」と天が呼ぶ声が聞こえた。しかし、当然そこには何もなかった。

ふたりぼっち

みのすけ

誰もいない静かな教室で、二人の学生が向かい合って座っていた。片方は不機嫌そうな顔の男子生徒で、目つきが悪い。もう片方は穏やかそうな丸い目尻が特徴的な、少し毛色の変わった女子生徒である。

「まさか下村に、宿題教えて、なんてことを頼まれるとは思ってなかった」

男子生徒が無表情のまま言う。表情とその平坦な口調から、それは不満げなものに聞こえるかもしれないが、彼は決してそんなことを思っていない。

「私頭悪いですし、上原さん暇そうでしたから、ちようどいいかなあって」

下村と呼ばれた女子生徒が、朗らかに笑いながら返した。悪意は感じられないが、失礼であることに変わりはない。しかし、上原と呼ばれた男子生徒は気にすることなく、彼女に数学を教えていく。

はた目から見たら恋人とでも見えるのだろうか、決してそんなことはない。この二人、今日初めてまともに話した上、二人とも人間関係の構築が致命的に下手だということをここに記しておく。

上原は物事を知ることに関して、類い稀な才能を持つ高校生だ。物事がどうしてそうなっているのか理解して、それをもとに行動することができる。

しかしながら、彼のその脳みそは他人の感情の機微を感じることでできなかった。共感する能力が抜け落ちていたのである。幼稚園小学校中学校高校と、彼は他人と仲良くできなかった。相手の評価をそのまま伝えてしまうことと、どこでも自分が一番だと考えていたから、とその二つが理由に挙げられる。故に、彼には友達がいなかった。

「いや、いや、今日は偶然暇だっただけだ」

偶然なんてことはなく、それは必然的に暇だった。

いや、俺は別に友達がいらないことを隠そうとしているわけじゃない。そもそも低レベルな友人なんて持っている方が損なのだ。と、理由を付けて、内心の焦りをごまかす。

「そうなんです、普段も暇そうだったから、今日も暇かなって思つて、声をかけたんですよ」

「!?!」

「やっぱり、普段忙しくても学校では余裕のある生活を送れるなんて、すごいですよね。逆に私なんて勉強も苦手ですし」

「……………」

「あれ、どうしましたか？ 怖い顔ですけど」

屈託のない笑顔によつて踏みこじられていく、上原の心。

「下村はデリカシーがないよな……バカなんじゃないのか」

この発言は決して、悪意あつてのものではない。相手の欠点を指摘してやっている、のである。悪意ではないが、決して褒められない傲慢な態度だ。しかし、彼自身は自分が一番という状況で偉そうになるのである。

「デリカシーって何ですか？ あと私はバカです」

デリカシーとは何か。上原は考えるが、相手の気持ちを守るための気遣い、としか分からない。そして何より、彼も持っていないものなので、本質的にはこの問いは彼が投げかけたくなるものだったに違いない。

「気遣いのことだな」

「気遣つてる……つもりではあるんですけど」

少々自信なげに、下村は問う。

下村は地雷を踏み抜くことに関しては何戦錬磨の女であった。しかもこれが意図的ではないから恐ろしい。男子に振られた友人に恋

バナを仕掛けたり、今のようには友達がいないものに対して、友達いそうみたいなこと言ったりと、空気が読めないことに関しては一流だ。しかし、彼女自身はどことなく他人に嫌われているのを感じており、なおかつ特に行きたくないため、自分のことを卑下する傾向がある。そのせいで余計に傷つく他人が増えるのだが。

これも、彼女が他人の発言になんら痛みを感じないからこそ起きる出来事である。彼女からすれば普通の発言をしただけで友達が離れていくのだ。故に、彼女には友達がいないかった。

「それにしても、下村は言うほど頭が悪いわけじゃないな。俺には及ばないが」

「わあ、天才なんですわね、上原さん。一人だけ頭いいですよ」

お互いにお互いをぶん殴るような会話である。

上原は仏頂面で、下村は柔らかい笑顔で、という違いはあるが、相手に嫌われるような発言であることが一致していた。下村に至ってはこれが意図的でないことが不思議なレベルである。

「そうだな、一応主席だから」

上原はこの会話が、少し楽しかった。自分で思っているアドバイスが受け入れられ、相手は相手でデリカシーがないながらも褒めてくれる。誰かと仲良くなりたい、とか他人からこう見られたい、などがない上原は、他人に合わせるということをしてこなかった。だからこそ、相手の悪いところを気にせず話し続ける、下村との会話は新鮮だったのだ。

「じゃあ、上原さんならこの問題も余裕で解けますよね」

下村も、会話の中で安心していた。いつも話していると他人は離れていってしまうけど、みんなとは違って上原は話し続けている。

自分から何故人が離れていくのか理解もしていない下村からすれば、上原の傲慢な態度など気にも留めない、いや、むしろ受け入れてこそいる。会話していても離れていかない、それだけで彼女はどことなく安心していたのである。

「任せろ」

「わーい」

そこに、ひとりぼっちの姿は、もうなかった。

宿題が終わると、外はもう夕方になっていて、部活動に精を出していた学生たちが次々と校門を通り帰っていくところだった。上原と下村も、帰り支度をして、教室を出ようとする。

「では俺はこれで」

「ありがとうございました」

上原は、仏頂面で振り返り、礼をする下村を見下ろした。

「そう言えば、もしもまた俺に教えてほしいと思ったら、その時は教えんでもない」

ツンデレなセリフに聞こえるが、そういうことはなく、ただ常に暇だからというだけである。頼まれないと教えない、というのはやはりプライドから来るものだろう。

「ぜひとも、暇なときにお願ひします」

下村も意識して言ったわけではない。これはただ本当に暇なときにも頼もうというだけの言葉だ。

「じゃあ、また明日」

「はい、また明日」

そうして、今日できた奇妙な二人組は解散する。

彼らを言い表すものとしてカップルはおかしいし、それならばと親友と評するのもおかしい。言うなれば、ただの友人である。

つまり彼らはお互いに、ただ一人の友人なのだ。

おわり

便座カバーの青を見た

ツリウム

その日、トイレに立った。

木製の分厚い板に金色の取手がついているいつもの扉を開けると、そこに私の見慣れた洋式の便器は無かった。正確には、便器それ自体はあった。有無をいわさぬ陶磁の白。それを覆い隠す物体が存在したのだ。

それはどうやら用を足すときに座る中蓋を包み込んでいるようだが、現に便器の上に鎮座する上蓋は白い輝きを放っている。

見た限りでは繊維に近いものが素材として用いられているようであった。これだけでも十分に冒瀆的であるのに、その色は濁りのない青色である。私は絶望せずにいられない。

秘蔵のワインに自らのあずかり知らぬところで汚泥が垂らされたようなものだ。誰の所業かは分からないが、見つけた暁にはその人物の大事な物に思いつく限りの穢れを塗りたいと、そう心に誓った。

即座にトイレを出て、後ろ手に扉を閉める。どうしても、あの青色が頭にちらつく。私はなにか重大なことを忘れていたのではないかと、という気持ちになる。

いやいやそれはただの妄想、異常事態に気が動転しているのだと自分に言い聞かす。それでももしないとまたあの不気味な青のもとへ向かってしまいたいそうだった。

足早に廊下を歩き、外出用のコートとハンチング帽を着込み、それらに少し埃が積もっていることに顔をしかめながら外へ出る。とにかくあの場所から離れたかった。

上を見上げると程よく浮かんだ雲と背景としてある青い空。いつもと変わらぬ天球。この光景も見飽きてしまった。

その正体は人間に制御されたドームである。果てが見えない広大

かつ精巧なこの空は、ただ一つの空模様を映す欠陥品だ。

晴れ空が嫌いというわけではなかったが、毎日がそれではうんざりしてしまうだろう。画一的な心地よさには人間味が感じられない。そこには自由がない。不快な青色を、私は帽子を目深に被り直すことで視界から消した。

あてもなく歩いていると、いつの間にか地面は一面の鏡になっていた。空を仰げば人工の青、俯けば私の身長だけ遠くなった人工の青。

薬毒に苛まれて幻覚でも見ている気分だ。

来た道を振り返れば、代わり映えしない青の奔流。どうやら迷いこんでしまったらしい。

鬱陶しい地面は靴で強く踏み抜けば恐らく割れるだろうし、そうした衝動に駆られるが、得策ではない。鏡の下は何処に繋がっているかわからないのだ。自宅の庭に落ちたという話も、出られなくなったという話も、また地獄を見たという話もある。どれも眉唾な噂であるものの、否定するための根拠を私は持ち合わせていない。

途方に暮れて辺りを見回すと、一人の男が目に入った。彼もここへは迷いこんできたのか、しきりに周囲を窺っている。しばらくして私に気付いたのか、男は声をかけてきた。

「なあ、出口を知らないか」

砂漠の中でオアシスを見つけたような顔でこちらへ近づくと、その様子を見て、私の心でムクムクと悪戯心が鎌首をもたげた。

「出口は知らないが、今のここは危険だ。早く出て行った方がいい」そう言っただけで私は懐から警察手帳を取り出して訝しがる男に見せつける。警察の機能など失われて久しいが、大半の人間はそれを知らない。逆らえば有無を言わず牢屋に入れられるとそう思い込んでいる。杜撰すぎる管理体制だが、たちの悪い悪戯の成功率がぐんと上がるので積極的にそれを広めたりはしない。他の者もそうなのだろう。単に手段が存在しただけかもしれないが。

「な、何が起こってるんだよ」

「言えない。機密事項だ」

「しかしよう、出ろつて言われても出られねえんだ」

ともあれ、国家権力の象徴たるその手帳を見て、男はとりあえず私を信用してくれたようだ。私は頬がひくつくのを抑えながら嘘を続ける。

「簡単だ。鏡を割つて下に落ちればいい」

「いや、でもそれは」

「落ちるか、死ぬか、それとも一生空を見られない生活か、どれがいい？」

そこまで言っても男はどこか逡巡している様子であった。未知というのは権力と同等かそれ以上に恐怖を覚えるものだ。それは本能的な恐怖。幼子が暗闇の中に妖魔を見出すのと同じことである。連続と紡がれる未知への脅威に、取つて付けたような社会的な脅威が敵う道理もない。

そしてそれを理解した上で私はこの男に、より強い恐怖を選択させる方法を探さなくてはならなかった。

一番に思いつくのは圧倒的な暴力。つまり本来警察官が携帯しているであろう拳銃をちらつかせるというものだ。しかし生憎、私はその単純明快な力を持ちあわせてはいなかった。家に戻れば拳銃はあるが、肝心の弾丸はもう使い切ってしまった。

どうしたものかと考えあぐねていると、男が間抜けな面で見上げていた。

「どうしたんだ」

問うた声にも男は答えず、そして急に足を振り上げたかと思うと足元の硝子を割りその穴へ飛び込んだ。

不思議なことに鏡が割れた時、音は一切しなかった。

私は顎をさすりながらふうむと唸った。

これではつまらない。

結果として当初の目的は達成できたが、その過程が伴っていない。バズルの最後のピースだけを他人にはめられたような気分だ。

しかし、そうはいっても男の代用となるものは周辺には見当たらない。そもそも男を見つけたのだつて、向こうが私を見つけた時の反応からして相当な幸運だったように思う。彼は何時間、ともすれば何日間もこの絶対的な青を見続けてきたのかもしれない。そう考えるとあの男を哀れだと感じないでもなかったが、もう二度と会うことはないだろうからどこまでも無意味な感情だ。

私は釈然としないながらも踵を返し、あてもない帰路に就く。

――そして次の瞬間、大きく開いた地面の穴に落ちた。青から黒へ世界が変わる。何も見えない。何も聞こえない。どちらが下かも分からない。

環境の急変に混乱した頭は、しかし数秒もすれば整理もつく。

男の見た物は、おそらく高速で落下する物体だったのだろう。それが何かまでは分からないが、男の行動には一応の理由付けをすることが出来る。そして間抜けな私はその落下物が鏡に開けた穴から落ちた。推測だが、大枠は間違っていないはずだ。

歩くときは下を向こう。今日起こったことからはそんな益体も無い教訓を得たわけだ。

下を向いて歩いていれば、鏡張りの牢獄に放り込まれることも、そこから足を踏み外すこともなかった。

そも、気に入らないことがあったからといって無闇に外へ出なければ良かった。原因からの逃避ではなく、排除を行うべきだった。自らの浅慮さは自覚していたつもりだったが、まさかこれ程までとは。今更悔いても遅すぎる話ではあるが。

気づくと私は自宅のトイレの中にいた。あの忌々しい青はそのままである。

しかし、あの不可思議な体験をした直後だったからか家を出る前ほどの嫌悪感はない。

結局のところ、なぜ私の家のトイレにこんな物が取り付けられたのだろう。それもわざわざ私の毛嫌いする色を。

青といえは、空だ。

当たり前のことを心の中でつぶやいて、しかしその短い言葉の中にどうしようもない違和感を覚える。

私は天啓を得たような気持ちで顔を上げた。

違う。そうではない。私の嫌いな青は、空と等号で結ばれるわけではない。

——私が嫌いなのは、あの忌々しい青は、ドームに映された変化のない空だ。

その考えに達した直後、私の体は広大な青色の中にあつた。遮るものが存在しない、半球の青。

眼下には星の丸みをも目視できる地平線。そして私から見える地表の半分ほどを覆うドーム。

根拠など無いが、それは私が暮らしていた、毎日が晴天のデイストピアだという確信を持った。

つまるところ、便座カバーの青は空の具象だったという訳だ。

なんだ、と私は小さく息を吐く。あれは誰が画策したわけでもない、私自身の心象だ。

事ここに至ればあの男が自ら地面を割った理由も明確になる。ただ何かが落ちてきたからではない。ドームを突き破つて、つまり外の世界からその何かがやって来たことが、彼を恐怖の淵に立たせたのだ。

さて、これですべての謎は解かれた。

あとはふわりと浮かぶ雲を眼下に据えながら重力に従うだけだ。

心地よい浮遊感に身を任せながら落ちていく。

ドームの中と変わらぬ青地に白を置いた風景。時が経てば空が雲で覆われ、雨が降りもするのだろう。今の私にそれらを見届ける時間はない。

しかしそれでも、私にはその景色が何故か愛おしく思えた。

少年

箱庭氏

Kの家の二階には非道く軋めく梯子段が掛かっていたように記憶している。城下の古雅な町の、軒を並べ、息を詰め、蹲っている内のどれかであったのだが、今はもう門札が外されているのでどれだか判別が附かない。その二階の一室を彼は書齋としていた。いつも令夫人が取り次いで、請される部屋はそこで、行く度行く度に本が増えている場所であった。引越したといわれ初めて覗いたときはまだ据えられた本棚にきつちりと取まっていたが、何事かで訪れる毎に、棚が天井まで成長し、壁を這い、鉤の手に曲がり、それでも溢れた本がその眼前に積まれているような状態であったから、その梯子段が呻る度に書齋の底が抜けないかと冷や冷やした。その旨をKに伝えると、笑って「まあ当分は抜けない」とからからしているのだから、令夫人の惻れ物もいわないのも訳ない。

その日のKは一寸妙であったと思う。昼過ぎに訪ねてみたものの、どこか覚束無い様子で、こちら話を聞くには聞いていないらしいがふらふらとして返事は心許無い、呂律が回らず、丁度酒を呑んだような具合であった。どうしたのかと訊くと、いや、解らない、どうも随分と前から熱のあるような気がするが、風邪かも知れない、薬を飲み過ぎたのだろう、厭な咳が出る、とたどたどしくいった。それから二言三言いったと思つたら急に黙り込んで仕舞つて、何事かと口を嚙んでいると幽かな吐息が聞こえた。どうやら寢息のようだ。手持無沙汰で仕方が無いから彼の坐している椅子の正面、黒檀の机から乗り出して冷ややかな硝子戸を引く。中秋の、夏より和らいだ日が、周を柔らかく彩えて、名前も知らぬ広葉樹の端を淡く染めている。あの、夏の鮮烈な色合いも嫌ではないが近頃はどうも合わないようでもちかちかする。歳であろうか。窓を越して流れ込む風が僅かに冷やりとしたので閉めて、先刻掛けていた椅子に腰を下ろし

た。

椅子に埋もれて凝としていた。やあ失敬、眠って仕舞ったようだがね済まない済まない、突然の声は暫くぼんやり外を眺めていた私を心底吃驚させた。Kに目を移すと、まだふらふらしているようのは変わらずで、椅子に深く身を沈めている。だから何の用事があつたか忘れたが(困窮していた時分でないの金の話ではなかつたはずだ)、今日はもう帰るよといつて起つた。帰るか、そうか、電車賃はあるんだろうね、いや、まあいいやとぶつぶつ呟いてからこちらへ向けて一寸待って貰えといつてKは降りて行つた。大分待ち惚けていた気もするがそうでもないかも知れない、しかしもしや私の事を忘れて放つてあるのか知らと思つたのは確かである。Kが呻る梯子段を昇つて来て私の眼前に起つと出し抜けに、両の手を出せといふので何かと訝しみながらも差し出した。その上で蝦蟇口が引つ繰り返される。じやらじやらと硬貨が出て来て私の掌に積もつた。流石にこんな要らない、そもそも僕は帰りの電車賃位持っている、Kに告げると、そうかそうだろうが、まあ持つて行き給えよといつて退かない。仕方が無いので硬貨を一度総て渡して必要な分だけ(国鉄が二十円の時分であつたので五十円かそこらだと思ふ)、抓んで右手へ収めた。出口のところまで振り返つてそれじやあ左様なら、いうと、ああ、と短く返事して黒檀の机へ向かつて行つた。

苦勞して梯子段を下つて行く最中に、Kが突つ伏したか、じやらじやらいうのが聞こえた。ほんの瞬間、梯子段と硬貨の奇妙な二重奏を聴いた。

夢を見た。本当は夢か現か判然しないのだが、現ではあるまいと思ふので夢であつたのだろうとしていた。

Kの家へ行こうとしてどこをどう行つたか知らないが非常に不思議な場所へ迷い込んで仕舞つた。非道く渺々とした中に亭々たる老樹がひとつだけ突つ立っている。足の裏に短い草の感覚がある。見遣れば裸足であつた。空は抜けるように澄んでいる、先刻と変わる

らない冬の仄かな日差しではあるが、冷たくはない、冬と春の混じる早春の日だ。妙な心地である。その老樹以外、他の物総てはその日に緩やかに溶かされて、輪郭を持たない、液体のようである。

その樹の根元、少年が坐っているのを見掛け歩み寄って行く。

果たしてその少年はKであった。彼の幼い頃など知らないが、そう直感した。少年からやあ、この前はきちんと帰れただろうね、君は少し抜けているから財布でも落としてるんじゃないやなろうかと心配して電車賃を渡したが云々といわれれば、K以外であるはずが無いと思うのだ。なぜ彼が少年で、こんなところにいるのかと考え凝としているとまあ落着き給えよと彼の隣へ導かれた。柔らかな草の上へ坐るとようやく己も幼くあるのに気が附いて、掌を見詰めた。

そこには隣のKと同じ少年期特有の無性別さがあつて、ふと彼の方を見た。そんな積もりも無かつたがまじろがずに見ていたようで、どうしたんだい、僕の顔に目と鼻と口と耳とそれ以外に何か附いているかい、Kが訊く。全くこれはKの好きな冗談であり、見詰めていた照れ隠しついでに眉が附いているが他は別段何もないと茶化して返した。そうかい、なら好いが、幼い顔に不断と変わらぬ口調というのが今更ながら可笑しくなつて、それが顔に出たらしい、矢張り何か附いているんじゃないやなろうねと真剣に問うので堪え切れずに声を出して笑つて仕舞つた。けらけらと一頻り済んだところで好い加減にしないかと小突かれ、笑みを収める。それからここは一体どこでどういふところなのかと訊いた。Kは全く当然といった風で知らないよ、僕が知る訳無いだろう、擲揄うようにけたけた笑うので、ではなぜ君はここへいるのかと違う問いへ移行する。なんでだろうね、解らないな、何でも無いようにいつて退ける。解らないのにいるのか、彼の顔を覗くように見詰めると、全くといって呆れられた。

「君は何でもかんでも訊きたがるね。それに答えを欲しがる。僕は知らない内にここへいて、だからなぜここにいるか、ここはどこかなんて知らないし、まあ、別にどこへ行く当てもない、こここの居

地も悪くないからいる、これじゃあ不可ないかい」

「不可ない訳無いけれども」

「じゃあ好いじゃないか。そんなに気にする事ないよ」

Kは全く楽天家であつた。私はいつ何が起るか知れないと冷や冷やしていたが、彼の判断はいつもきつちりしていて、大事に至つた例もないので、そのからから笑つているのを見ると、突然に、それも変挺な空間に放り込まれて（私の行動としては迷い込んだというのが正しいのだろうが、そのような心持であつた）無意識に詰まつていた息がほうと漏れた。

老樹に体重を預けて、裸の足を投げ出す。幼く柔らかな踵と短く嬾やかな草は争わない。心地好くなつて、体から力を抜いた。不意に、非道く幸せだと思つた。Kは何もいわずに、私の左へいた。爪先ばかり眺めていたので表情は窺えなかつたが、周の空気はゆつたりとして、冬と春の境目の柔らかな感じだつた。

「ねえ」

俄かに覗かれ、少し肩が跳ねた。そのまままじまじと見詰められれば、気恥ずかしくもなるが、しかし、どこか目を離せなくて凝としてゐる。生き生きと躍る黒髪が、瑞々しく澄んだ眸子が、典麗な面輪を成しているのが解る。化石した体が突然に、無意識に動く。白皙ゆえか頤の辺りから外気に、なにも溶かしてしまう早春の日に溶けて仕舞いそうで、細い体軀を抱きしめた。

「幸せだ」

少年は私の腕の中で呟いた。静かな声は些少震え、掠れていて急に眠つて仕舞つた時のKを思い出させた。

「僕もだ」とゆつくり息を吐いた。

「好かつた」

Kの腕が背に回つた。いつの間にか斜陽を浴びて老樹が朱に濡れている。少年の多少高い体温が、腕と背中との接点から、互いに渡つて、溶けていく感じがした。

Kの訃報を聞いたのはその妙な夢を見た丁度翌週であった。令夫人がいち早く報知してくれたのであるが、通夜へも法要へも行かなかった。特に何か用事があった訳ではない。通夜の日は終日文机へ向かつて、しかし何もするでもなく呆けて過ごしたし、法要の日はふいと出かけた。

蝦蟇口の財布だけ引つ掛けて、適当に買った切符で適当な線の電車に乗った。ごとごと揺られて、終点まで行けば適当に引き返して、途中で降りれば別な電車へ乗り換える、を片手だけ繰り返した時に、借りた（正確には押し付けられた）電車賃を返していない事を思い出した。それで、Kの家の最寄りまで大分大回りで行って駅から出た。

Kの家は深としていた。まだ法要なのだろう、予想はついたので、門札の上に硬貨を置いた。随分安価い饒別だな、ぱちり、財布の口を閉じた。

駅へ戻るのもどこか面倒であったので潮の香りする方へ、同じ顔した民家の間を摺り抜けて、ふらふらしながら歩いた。とろとろ歩いて、それでも三十分すれば波のさざめきが聞こえる。見えた防波堤に近付き、一寸苦勞して登る。立ち上がると、海と空の交叉し溶け合うところまでよく見えた。幼い時、危ない、不可ないと怒られながらも見たかったふたつのあおの境界も、頗る簡単に見れるようになった。私は腰を下ろした。腰掛けて、何もせずにぼんやり、時折足をぶらぶらさせながら、凝とあおを見ていた。

ふたつのあおは、陽が沈み始めると急に色を変える。ゆうくりと落ちる太陽が空を朱に染める。白い光の塊が海の境に溶けて、残りひと欠片も溶け切って仕舞えば、やおら海がじわりと滲む。星が瞬くまで眺めていた。

Kが死んだのは、屹度、Kの死んだその冬の日が、見た夢のような柔らかな日差しであったからだと不意に思う。ほととぎすの鳴く春の日差しであったからだ、と。彼の令夫人が御母堂の下へ

移ると、態々葉書でくれたのはもう一年も前の話だが、今でもその一考が私の脳から離れないでいる。

白くある肌の、大方指先から外気に溶けてゆく。掌が、腕が、踝が、腿が、澄んだ無色に成る。艶めく皮膚の最後のひと欠片が溶け切って仕舞えば、端からじわりと紺青が滲む。そうしてKは、Kだけではなく人は、皆死ぬのだと妄想する。

私にはまだそれが冷たいのか、温かいのか判別できない。それでもKが幸せだといったのは真意のように思えるのだ。

彼女と林檎と最後の我儘

小刀

ガタンガタンと揺られるバスの中、僅かに色付き始めた田んぼと熱に揺られるアスファルトを眺めながら一人頰杖をつく。イヤホンから聞こえてくるのはこの辺のローカルニュース。議員が不祥事をやらかしたとか病院で薬が盗まれたとか犬が表彰されたとか、大抵の人は退屈と思いきや話題が多い。実際私だって、通信制限が後一步まで迫ってなければスマホゲームに興じていたことだろう。いや自業自得だからしょうがないし、ちよつとした話題も出来たから別にいいんだけど。

『次はく日村病院前く日村病院前く』

気分転換にイヤホンを取ったところで、バスが目的地間近のアナウンスを寄越す。慌てて座席近くのボタンを押すと、何とか間に合ったらしくバスは止まってくれた。

運賃を払おうと出口近くまで歩いたところで、流れ込んでくるのは嫌になりそうな温い空気。いや「温い」で済んでいるだけマシなのだろう、外に出たら「暑い」になること間違いなしだ。なんて予想に肩を落としてつつ鞆を担ぎ直し、バスが発つを見送ってから歩き出した。

八階建ての施設の五階、その突き当たりに目当ての部屋はある。

ドア横のプレートに目をやると、そこには三つの空欄と一つの名前。四人部屋なんだというのには私にも分かる。そこに「大嶋結」と書かれているのを確認して、ドアを軽く三回叩く。

「はい、起きてますよ」

検診か何かで訪れた職員と思われたらしく、中から返ってきたのはよく澄んだ落ち着きのある声。あのね、私そんなに偉くないよ？

「私綾乃。看護師さんとかじゃない」
「綾乃ちゃん……？ 入って入って！」

先ほどとは違い、嬉しさを滲ませるところか全開にした声。それを聞いた私は戸を引いて部屋へと入る。

目に入るのは着替えを入れるであろう棚と窓を覆うカーテン、真っ白なベッドの上で身を起こす少女に繋がれた色々な機器は規則正しい機械音を刻む。彼女に点滴が刺さってないのは、今日の分が終わったことを示しているのだろうか。

「おひさー、結。ごめんね全然来れなくて」

「ううん、嬉しいよ！ どうしてもこの時期はお見舞いとか減っちゃうし……」

「お盆近いし、みんな帰省してるんだよ。そうだ、せっかくだし林檎むく？」

「お願い！ 綾乃ちゃんのとこの林檎美味しいし大好きなんだ！」

「はいはい」と

鞆を手ごろな台に置き、中身を取り出していく。祖父母が林檎農家をやっているお陰で、こういうときの見舞い品に困ったことはあんまりない。というか自分は林檎が好きじゃないから、そういう意味で喜んで食べてくれる結には感謝してるし。

タオルに包まれた大きい林檎、財布、ケースに入れたナイフ、簡易まな板とラジオに家の鍵に……

「……あれ？ あれ!？」

「綾乃ちゃん、そんなに慌ててどうしたの？」

中身を全部取り出し、底を引っ掴んで必死に揺さぶるも目当ての品が出ることはなく。流石に結も心配してくれたらしい。ギチギチと鳴りそうなくらいゆっくりと振り向き、泣きそうな声でその理由を告げる。

「スマホ、落とした……？ バス降りるまではあったのに……？」

事の深刻さを理解したらしく、一瞬真剣な顔になった結がてきぱきと指示を出す。

「とりあえず鍵とか貴重品持って受付で聞いてみて。無いなら誰かが拾ってるかもしれないけど、最近警備が厳しくなってるから持ち出したりは無いと思う」

「わ、分かった！」

とりあえず鍵と財布を鞆に詰め込んで弾かれるように病室を出る。幸いエレベーターは五階にあった。

「頼むから届いててよ……！」

一階のボタンを何度も叩きながら、ただひたすらに祈り続けた。

「なんとか届いてた……」

「よかったね、お見舞いで携帯失くすとか私も申し訳ないし」

「いや悪いのは落とした私だから」

結局あの後、たまたま巡回してた看護師さんが落し物として見つけてくれてたお陰で事無きを得た。結の言っていた通り、モノ絡みのあれこれについて病院側も敏感になってるらしい。そうじゃなかったらどうなってたか……

「いつもみたいに皮付きの八つ切りでいい？」

「それでお願いー」

ざくりざくりと林檎に刃を入れながら話を振る。

「そういえば結の予想当たってたよ。結構気を付けてたから見つけられたって言ってたけど、ニュースになってたあの事件絡みだっけ」

「うん」

「行きのバスでも聞いてたんだけど、どんな事件なの？」

「えつとね、まず当時の状況だけー」

そこから五分ほど、林檎をかじりつつ結は事件について話してくれた。正直半分も理解できなかったけど、それでも聞く人にとつては分かりやすいと思えるんだろう。あと林檎を食べて美味しそうに目を細める様子がホント可愛い。

「……まあ要するに、私とかみたいに呼吸器が悪い人じゃない限り大した害もない薬だからそんなに話題にならなかったの」

「なるほどね、ちなみにもし結が飲んじやったらどうなの？」

「多分死んじやうかな」

「えっ」

「……冗談だよ。量次第だけど、せいぜい呼吸が止まる程度で済むと思う」

「それを精々つて言えるのは結くらいだけど、まあそれが普通だもんね……」

結曰く、彼女は生まれつき体が弱かったわけじゃなく、突然体の一部が悪くなつて入院することになったらしい。実際に二くらいまでは一緒に遊んだり勉強したり、俗に言う幼馴染くらいの関係でいたわけだし。ただ時折呼吸が出来なくなるとかで、かれこれ四年は入院してる。私は高三だけど、結は中学卒業で止まっちゃってるし。まあ彼女は真面目だし、病室でも勉強してるらしいから病気さえ治れば就職には困らないのかな。

「そういえば綾乃ちゃん、言い方悪いけどこんな時期にお見舞い来て大丈夫なの？」

「つて言う」と

「もうあと半年もしたらセンター試験だし、一日でも勉強しとかないと後々大変だよ」

「あー……大丈夫だよ」

さつき拾ってもらったスマホを操作し、一枚の写真を見せる。あまり病室ですべきことじゃないのかもしれないけど、ちよつとだけだし認めてくれてもいいよね？

「奨学金いけそうな所で推薦通ったから、受験勉強はしなくていいんだ。時々大学に行つて先行授業受ける必要はあるらしいけど、夏休み中はずっとフリーだよ」

ここから割と離れた県にある大学への合格証書。下宿代はかかるけどそれでも授業料よりは安く済むし、レベルもそこそこあるからあまり問題はないって両親の太鼓判は得ている。

「そっか、おめでどう。綾乃ちゃんいつも頑張つてたもんね。そり

や報われるよ」

「結に言われるとむず痒いけど、ありがと。この二か月がヤマだったから来れなかったの」

「いいよそんなの！ むしろお見舞いに来て落ちたとか言ったら怒るよ？」

「あはは……」

……言えない。二か月会えなくて私も寂しかったから来たなんてまあ彼女も同じこと思ってるだろうし、別に言わなくてもいいよね？

「けど結構遠いんだね、通う訳にはいかないし住み込みになるの？」

「そうだよ、まあお盆と年末には帰ってくるつもりだし」

「……そっか」

彼女の顔が一瞬寂しげに見えたのは、気のせいだろうか。いや、多分気のせいじゃないのかも。知り合いがどんどん見舞いに来なくなる中、数少ない友人の私が出来ないとなると寂しがるのは当たり前だ。

「大丈夫、頻度は下がるけどちゃんと顔ですから！」

「あ、ありがと！ それじゃ大学行きも決まったことだし、この二か月のこと色々教えてよ！」

「もちろんいいよ。そっちのことも教えてね」

「うん！」

来た頃には天頂に昇っていた太陽もすっかり西に沈み、病室内に橙色の光が差し込んでくる。最初はハイテンションで語り合っていた私も、時間が経つにつれどんどん調子が下がっていった。二人揃って沈黙すると、部屋に響くのは心音を捉える機械音のみ。

「長居しちやっつてごめんね、また明日も来れるから、今日は一旦帰るよ」

荷物を片付けて部屋を出ようとした私、その裾を掴ままれ振り返る。こちらを見つめる結の顔は僅かに青いようにも見える。

「……綾乃ちゃんは」

「うん」

「遠くへ行っても、私のこと忘れないでいてくれる？」

……やっぱり寂しかったんだ、離れ離れになるのが。もちろん私だつて寂しい、けどいつかその日は来るんだよね。なら今はせめて、「もちろん。というか結も私のことを忘れないでよ？」

そんな軽口を叩き、彼女にハグしようとして近寄ったところで――

――彼女は血を吐いた。

それからのことはよく覚えていない。確かお医者さんたちが何人もやつてきて懸命に処置したけど彼女は助からなかったこと、彼女の体から盗まれた薬の成分が検出されたこと。詳しく調べてその出所が私の林檎とナイフからだったこと、当然提供者の私が疑われて連行されたこと。そして、「自殺しようと思ったが怖くて友人を利用してしまった」という遺書と薬瓶が見つかったことから私の無実が証明されて釈放されたこと。断片的には思い出せるけど、全部をはっきりと思いつける訳じゃない。結局あの後にはパトカーで家まで送ってもらい、そのまま寝てしまった。家族は私に何も聞かなかった。

「ん……」

時計を見ると現在五時。変な時間に起きちゃったけど、むしろ今まで眠れていたのか。むしろ心が悲鳴を上げて気絶してしまっただか、そんなことももう分からない。

「あ、ナイフ洗わなきゃ……」

誰に聞いてもらうわけでもないのに一人呟き、ナイフを取り出したところで。封筒が一枚、床に落ちる。

「……？」

のろのろと緩慢な動きで手紙を取り裏返す。そこには「綾乃ちゃん

んへ」と書かれていた。

気が動転していたのか、乱暴に封を切り手紙を取り出す。そこには丸々とした可愛らしい彼女の筆跡で、私への思いが綴られていた。そして、それを読んで私は思う。彼女の意思が理解できるにしろ理解できないにしろ……

「……一生、忘れられないよ。何があっても、絶対に」

綾乃ちゃんへ

もしあなたがこの手紙を読んでいる時、私はもうこの世にいないでしょう。つて一回書いてみたかったんだ。まあそれはそれとして。綾乃ちゃん、私はあなたのことが好きでした。幼い頃から一緒にいてくれただけじゃなくて、入院してからも忙しいのに毎日欠かさず来てくれたこととか。書き出すときりがないから、このくらいにしておくけど。

けど、ううん、だからこそ、あなたが来てくれなかったこの何ヶ月かは、寂しくて寂しくて仕方がありませんでした。そして私は考えてしまいました。「このまま忘れられてしまったらどうしよう」と。

そこから先は毎日怖くて怖くて仕方がありませんでした。私はまだまだ入院しろと言われています、けれど貴方は自由、いつ私から離れてしまうかわかりません。もちろん悪いのは病に侵された私です。ですがそれでも、私は怖くて仕方がありませんでした。

そこで私は思いついてしまいました。「あなたが私を殺してしまえば、私はあなたの中に一生生き続けられる」と。愚かなことに、私は自分を止めることが出来ませんでした。

万が一あなたがりんごを食べてしまってもいいように、そして私が犯人だとすぐ分かるように、病院に忍び込んで薬を盗み出して病室に置いておきました。この手紙を読んでいる以上、あなたは解放されていることだろうと祈っています。

……最後に一つだけ、願わくば「こんな最低な私のことを、忘れないでください」。それだけが、私があなたに死なせてもらった理由です。

最低の友人、結より

了

イラスト

ト

作品

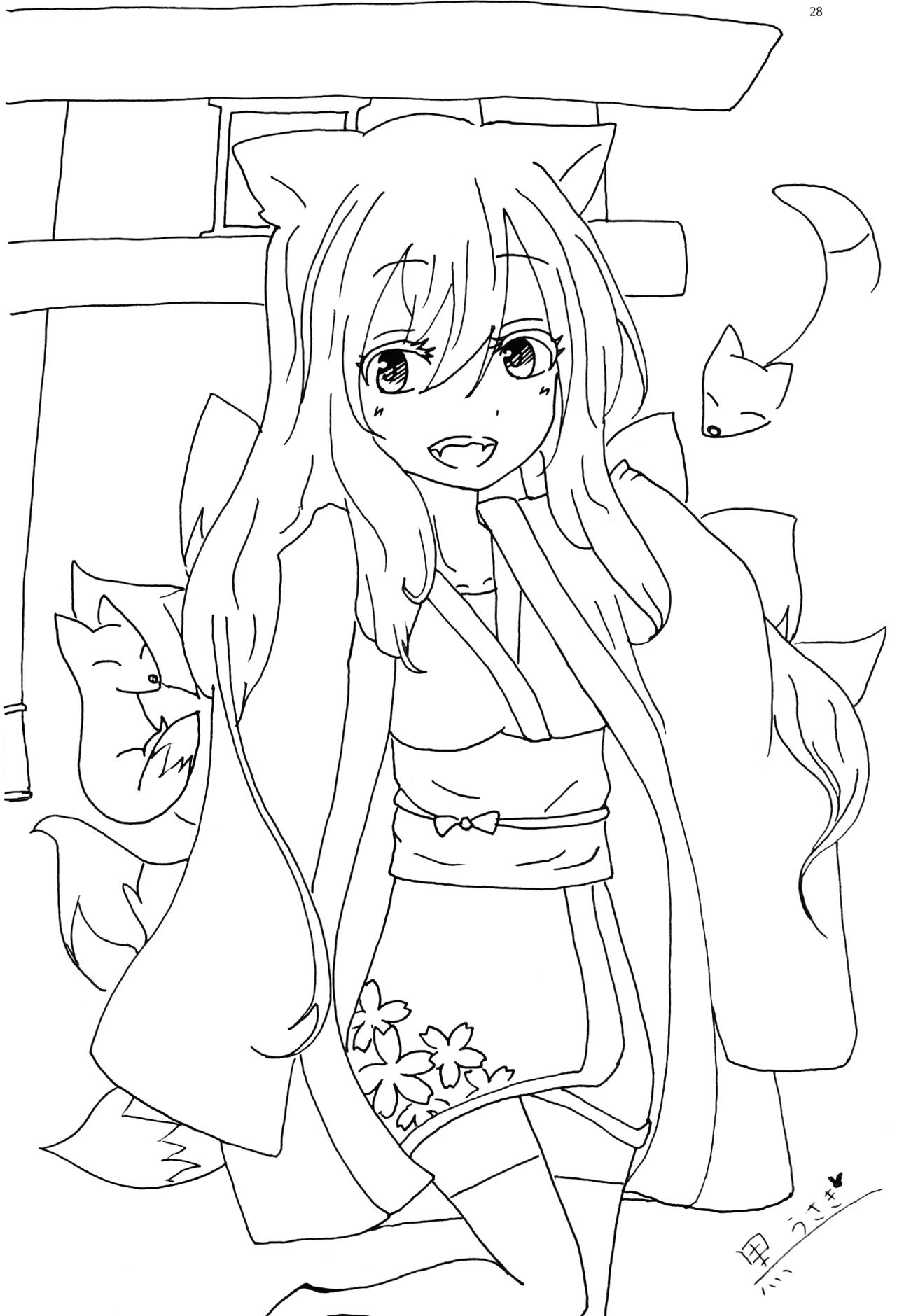




illusted
by Less => Jack

(死神)

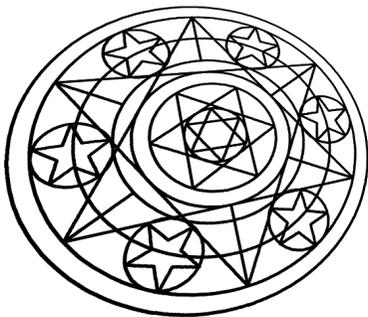
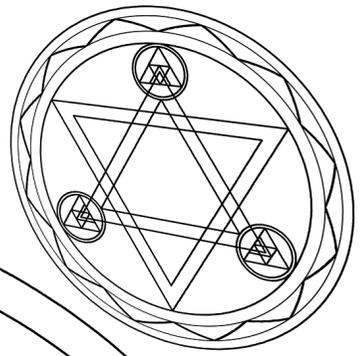
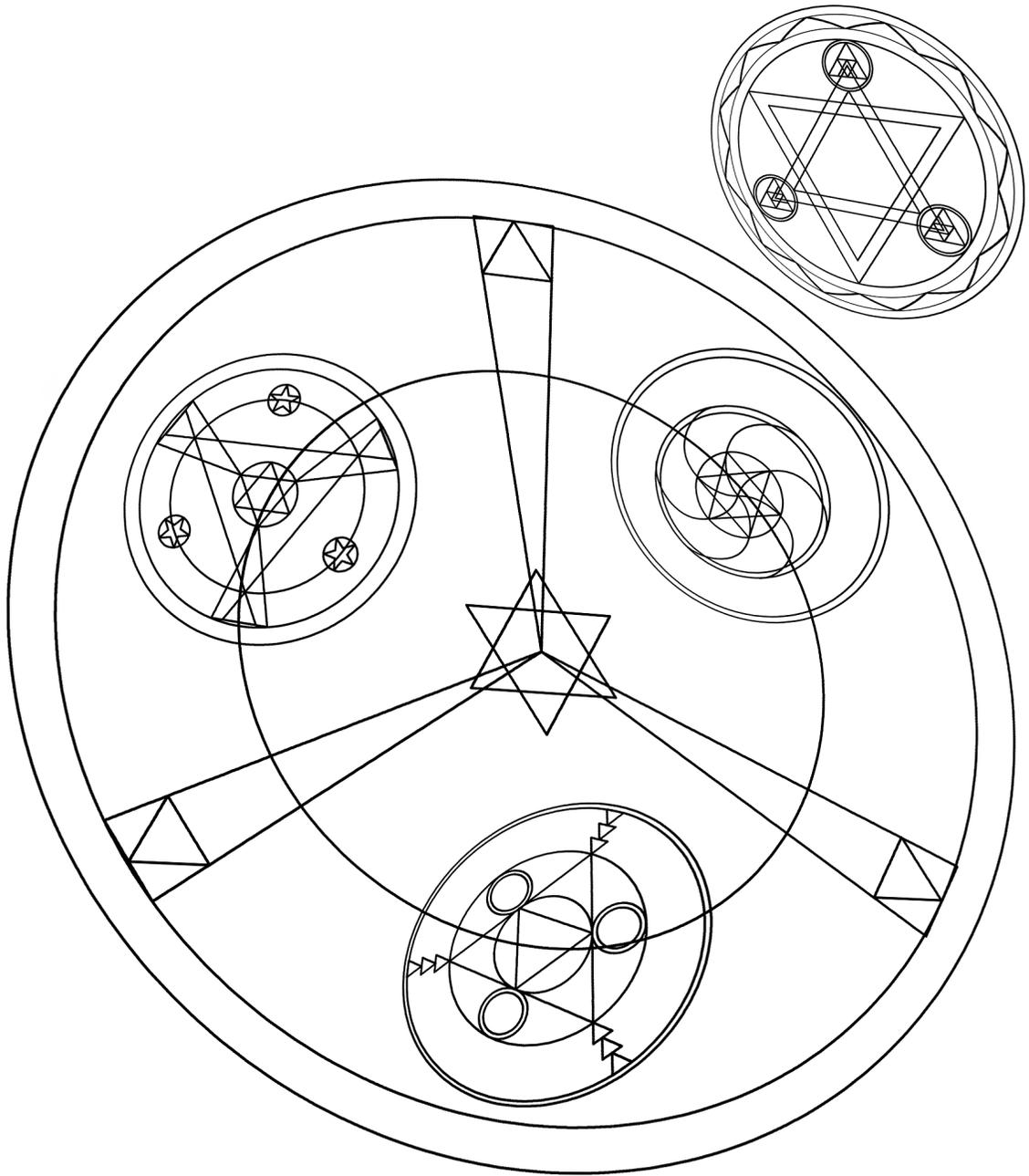




甲斐ウツナ

Illustration by Claude





 *Tadaren*



猫一様



Handwritten signature or artist's mark.



あとがき

みのすけ

猛暑が嘘のように消え去り、段々と寒くなってきましたが、皆様のようにお過ごしでしょうか。それぞれに色々な事情及び生活があると思われませんが、私はひっそりと生きています。主に勉強の順位とか……文章の内容とか……極めてひっそりしています。ひっそりひっそり。

起きて半畳寝て一畳という諺がありますが、なんとなくその通りで、身分相応に、欲張ってはいけません。欲をかくと大概失敗する気がします。大胆だったりする人なら、それでも成功するのかもしれないませんが、残念なことに私は悩みが多いので、文字通り失敗しています。結果、今回二ページしか書いていません。

これが失敗なのか、はたまた悩んだ結果なのか、そこは判然としませんが、とにかくそういう結果に終わりました。

そこで他の人の作品を見るとよくできているように思えるんですね。隣の芝生は青く見えると言いますが、それは差し引いてもよくできていると思います。

人間の持つ最大の武器は、想像力である、とかなんとか、聞いたことがあります。その武器が強いのでしょうか。多分。物を感じて想像できる力。実に羨ましいですね。

その想像力、感性を育む、という行為は、別に芸術作品に触れる必要はないと、勝手ながらに考えています。物を見て何か感じて考えればそれでいいのだと思います。一番大事なのは、意図してそういうことを考えることで、何も意識せずに見るのでは、何も想像できません。

人は何かによって、考えさせられてこそ、その想像力を発揮できるのだと思います。

この会誌にも、何かに触発されたことにより考えられた作品が

多いと思いますが、さらにまた、この作品から触発されて、読んでくださった方々が新しく想像を芽吹かせることを期待しています。宣伝のつもりでもありませんが、ここまで全部読んできたならもう一度、ここを始めて読んでみるなら——あとがきなのに読んでみる、とりあえず一ページ目から開いてみてください。さもなければ会誌というものの存在意義を果たせなくなりかねません。

もしもそこで、劇的な想像や、何か深いことを考えることができたなら、作った側としても、嬉しく感じると思います。

あとがき

きな粉もち

あー何を書けばいいのだ・・・あとがきというものを書くのは初めてだからよく分からないのですが頑張ります。

えっと、まずは『なけなしのかね』を見てくださりありがとうございます。同級生や先輩方の作品を見てガクブルしているところです。

会誌の編集方法を先輩が丁寧に教えてくださったのですが、感想を言うとしたら『方法を理解したって難しいものは難しい。』ですかね・・・。何か初めての事をするにあたって、大体の人は「慣れるしかない」と言われたり思ったりするのでしょうか。まあ確かにそうなのかもしれないんですが、その『慣れる』までどうしたらいいのやら・・・。タイピングもそんなに速いわけでもないし、プログラミングの経験もそれほどないし・・・。まずはこれらに慣れないと会誌の編集も絶対に慣れないよね・・・やることがありすぎてつらい。

『じゃあなんで編集やろうとしたの?』と聞かれたらそれは『ただただ楽しそうだし面白そうだから。』ですかね。だってこういった経験はあんまりできないことだと思っし、勉強にもなるし、何か初めての事をするってすごくワクワクする

し。初めてするのだったらせっかくなら楽しんできた方がモチベーションも上がるだろうし、より覚えようという意欲がわくだろうし・・・。

たとえ乗り気にならないような事があつたとしても一度吹っ切れてしまえば案外楽しかったりする、なんてこともよくあるかと。

・・・書くことが・・・見つからない・・・。

あ、今回私はこの会誌でイラストを描いたのでですが最初のほうにも書いたとおり同級生や先輩方の作品を見てガクブルしています。画力とセンスが欲しいよう・・・。絵を描くことはもちろん楽しいのですが、小説というのは一度も書いたことがないので(余裕があれば)いつか書いてみたいとも思っています。

最後に、改めて『なけなしのかね』を見てくださりありがとうございます。



ここまで読んでいただき
ありがとうございます。
編集のwolfです。

このキャラクターと現実のwolfは関係ないです



かめです

Twitterとかネットで
感想を言ってくるとみんな喜びます
「良かった」でも「悪かった」でも



現視研公式twitter

おどがき!

だるい……



へっしゅう
wolf

実はこの会誌、ほとんど私一人で
編集しました

たれかほめて

でも世代交代しなきゃ
いけないから後輩に編集教えたり
絵の大きさがお願いしたものと
違ったり……

作品を遅れて出してきたり……
作品を遅れて出してきたり……

編集って大変!
みんな! 締切は守ろうね!